

大謝名小のスタ場!!!

2022, 9, 26(月)

第28号

宜野湾市立
大謝名小学校

校内新聞

「スタ場」とは、「スタートの場」「スタディの場」「スターの場」を表しています。



2ページあります

つぼみが発芽するヒガンバナ



ヒガンバナ



地面からつぼみが芽を出して開花



田んぼのあぜに咲くようす

9月23日は「秋分の日」で、秋の彼岸ひがんでした。ところで、皆さんは、「ヒガンバナ」という植物の花を見たことがありますか？

4年生の国語の物語文『ごんぎつね』にも、でてきますね。

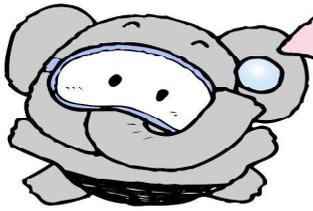
この花は秋の彼岸の時期にさくので、この名がありますが、球根（きゅうこん）からいきなりつぼみが芽を出して真っ赤な花を咲かせ、花が枯れた後で葉が出てきて、春ごろ枯れてしまうという変わった成長サイクルを持っています。

花と葉が同じ時期には見られないので、「花は葉を見ず、葉は花を見ず」という意味で「ハミズハナミズ（葉見ず花見ず）」という別名もあります。

ヒガンバナが咲くには、20℃前後の低温の時期を必要とします。球根の中で花が育つには、温度（特に地面の温度）が関係しているようです。

最近では、ヒートアイランド現象や地球温暖化に伴って、木々の紅葉・黄葉の時期が遅れたりします。それでも、ヒガンバナは例年同じ頃に咲きます。開花には温度以外の要因も影響しているのかもしれませんが。

（文責：玉村かおり）



ヒガンバナの別名いろいろ



ごんぎつねが歩いてきそうな田んぼ道

さて、ヒガンバナの球根（鱗茎）には、リコリンなどのアルカロイド成分が含まれており、有毒です。この有毒性や悪臭を利用して、モグラやネズミなどの小動物から田んぼのあぜ道を守る目的で植えたとの説があります（沖縄ではあまり見かけませんが、本土の農村地域ではよく見られます）。

一方、墓場にも多く植えられています（土葬をしていた頃）。これも、異臭や有毒性を利用して、遺体を動物から守る目的からだいらわれています。



墓のそばにも多く植えられていた

そのため、彼岸花の別名には「シビトバナ（死人花）」、「ユウレイバナ（幽霊花）」、「ジゴクバナ（地獄花）」、「カミソリバナ（剃刀花）」など、すこし不吉な漢字の名前が多くあります。

また一方では、法華経の「摩訶曼荼羅華、曼珠沙華」にある、サンスクリット（梵語）の”Manjusaka”（マンジュウシャカ）天上の赤い花」からめでたい象徴として「マンジュシャゲ（曼珠沙華）」という別名もあります。



白花種のヒガンバナ



ショウキズイセン

ヒガンバナは、江戸後期から現代にかけて、多くの物語や歌にうたわれています。先に触れたように、4年生の国語の教科書には、新美南吉の『ごんぎつね』

にヒガンバナの描写があります。また、上の写真のように白い品種やよく似た黄色のショウキズイセン（ヒガンバナとは別種）なども、同じ時期に開花して、秋の野をいろどります。

（文責：玉村かおり）